

大阪天満宮社報

第88号

てんまつんじん



新出の天神画像の修復	3 頁
講社連合会五十周年記念祝賀会	4 頁
吹田の民話「天神屋敷」	6 頁
電話番だより「十三詣」	8 頁
天満の天神さんと私(9)	
天神祭に惹かれてこの町へ	9 頁
天満天神研究会	11 頁
本社拝殿の屋根葺き替え	12 頁

表紙解説

「天神像」

大阪天満宮所蔵 絹本着色
縦八五・六cm 横三九・六cm
江戸時代初期 一幅
松浦 清（大阪工業大学特任教授）

束帯姿で上げ畳に坐る天神像です。束帯とは平安貴族の宮中における正装で、あえて洋服で譬えれば、モーニングに相当する儀礼用の服装です。その特徴は、冠を被り、袍と呼ばれる黒色の上衣を着用し、下襲と呼ばれる内衣の下部の裾を背後に長く引いて、威儀を正すための笏を執るものです。高位の文官は儀仗用の太刀も佩用します。束帯姿で描かれる天神画像はいずれの作例も同様の服装なので、どれも似かよって面白くないと感じる人もいるかもしれませんが、高官が身に着けるべきトータルコーディネートとしての厳格な規定がある以上、当然の類似性といえます。しかし、本図は一般的な束帯天神像とは少し異質なお気づきでしょうか。それは黒の袍の表現が普通目にする天神像とは少し違った描写となっている点です。

黒の袍の両肩部分を見ると薄らと文様が透けて見えることにすぐ気づきます。この文様は立涌文様と呼ばれる伝統的な有職文様で、身分の高

い公家の装束に用いられました。相対する二つの蛇行曲線からなるもので、曲線に挟まれた空間の文様によって、様々な種類があります。本図の場合は花立涌文様となっています。両肩から両腕にかけて、このような立涌文様が見えるのはなぜでしょうか。この部分に薄手のシヨールのようなものを羽織っているように見えます。しかし、実はそうではありません。上着の黒色の袍自体が立涌文様を施した薄手の生地なのです。袍の生地が薄いのは、夏服だからです。衣更えは旧暦四月一日と十月一日で、衣更えのルールは束帯では厳格でした。

薄い生地の袍を着用しているのに、胸から腹にかけての身頃の胴部には立涌文様が見えません。それは袍の下、下襲の上に袖なしの胴衣である半臂を着用しているからです。半臂の色は平安時代半ば以降に黒色となりました。黒色の薄い生地の袍の下に黒色の袖なしの半臂を着用しているため、胴部が濃い黒色となり、両

肩から両腕にかけて、薄手の袍の立涌文様が透けて見えるのです。

このような半臂を着用した天神画像はあまり見ることがない少数派といえるでしょう。半臂の着用を明示する天神画像は珍しく、一般的ではありませんが、大阪天満宮にはもう一点所蔵されています。以前、本社の第63号で紹介した天神像です。ご参照ください。

承久元年（一一一九）に成立したと考えられ根本縁起とも称される北野天満宮所蔵《北野天神縁起》でははっきりしませんが、それとは異なる系統として知られ応長元年（一一三一一）の奉納年記をもつ防府天満宮所蔵《松崎天神縁起》では、夏服の黒袍の装束描写を明瞭に確認できるので、ご覧ください。例えば、巻二で、法性房尊意のもとに菅公の亡霊が現われる「石榴天神」と称される場面の菅公や、巻三で、菅公の怨霊が清涼殿に落雷する「時平抜刀」と称される場面の時平などです。両場面はそれぞれ、根本縁起の詞書とも合わせ考えると夏の場面と認められ、それに対応して夏服の袍に配慮した描写となっているわけです。

本図では、画面上部の右寄りに松が描かれ、その細い枝に添うように

梅の枝が伸びて、薄紅色の花がわずかに開花しています。梅が漸く開花したばかりとなれば、まだ寒い季節ということになるでしょう。衣更えの前なので、画面の天神の装束とはズレがある表現です。

画面の上部左側には画賛が記されています。「愚堂」（印）と墨書されていますが、印影は鮮明でないため判読できません。画賛もなかなか難解ですが、誤読を恐れず判読します。

千歳月呼北野神

氣霜辛菅君曾不浮西海

草木無心各屈伸梅経雪苦

画賛の右に署名があるので、通常とは逆に左の行から右の行へと読み進めることになります。

草木は無心におのおの屈伸し

梅は雪苦を経て氣は霜辛す

菅君かつて西海に浮かばざりき

千歳月は北野の神とぞ呼びたる

贊者の愚堂は臨済宗の僧侶で妙心寺の住持を三度務めた愚堂東定（一五七七～一六六一）と推察されます。

禅僧の著賛は渡唐天神像にしばしば見るものですが、勿論、束帯天神像への著賛もあり、天神信仰と禅宗との強い結びつきを示しています。

当宮〈宝物・文化財〉の取り組み

―活用と伝承へ向けて―

現在、当宮所蔵〈宝物・文化財〉（美術工芸品、約一千点と目される）の活用と伝承に向けて再調査を継続的に進めています。これに関しても菅原道真公御神退千二百二十五年大祭事業の一環として修復事業や整備、展覧会企画も進行中です。ここではその一端をご紹介します。

◆再調査でつづく新発見、再確認

最も注目すべきトピックとして、昨年末、収蔵庫から「東帯天神画像」（絹本着色、図1は発見時の写真）が新たに見出されました。写真のような傷みのはげしい状況でしたが、一見して室町時代に遡る作例と判断されました。無款（筆者不詳）ながら、軸裏に天文年間（十六世紀中頃）の墨書銘「天神 天文九年庚子二月廿五日修覆之 今里妙法寺奥坊良尊」



東帯天神画像 発見直後、令和6年12月

（天文九年＝一五四〇年）が確認されました。松浦清氏（本誌の天神画像解説担当）はじめ美術史研究者の意見も求めました。当宮所蔵天神画像は約八十件を数えますがその中で最古の時期の作例であり、当宮に限らず全国の天神画像の中でも貴重なものとなります。早急な修復の必要性を報告、寺井宮司の判断を仰いで、現在大阪市立美術館修復所（岡墨光堂）で修復を行っています。修復に一年を要しますが、令和九年式年大祭にあわせた宝物展覧会での披露目を予定しています。写真のような損傷がどのように修復されるか、ご期待ください。

衝立も見出されました（紙本着色、図2）。表は神牛図、裏は歌仙図で、木枠は失われています。写真は発見時、左右で支えてくれている神職お二人から大きさが了解できます。

「華溪」の朱文印から京都の横山華溪の作と推測でき、牛背の織物、歌仙図の御簾の模様には、当宮の梅鉢紋が施され、当宮



神牛図衝立(発見時、令和7年5月)

への奉納を前提に、大塩の乱の後、現在の本社再建時の奉納が想像されます。本衝立も損傷が大きく修復活用の方策を探っているところです。

その他、天神縁起絵扁額（弘化年間奉納）や、不明だった梅花殿・参集殿襖絵が確認できました。いずれもこれまで十分な紹介がなされず、修復の必要もあります。今後本誌やホームページ、宝物の展覧会で紹介するべく準備しております。

◆御迎船人形の箱の整理と調査

こうした「再調査」は、昨年来「第二御文庫」取り壊し、境内各所の物品整理の作業にあわせても行いました。その中で境内の数か所に散在していた御迎船人形の箱の整理も行われ、造営課職員の尽力で限られた収納場所を最大限利用しています（図3）。御迎船人形自体は二十数年前より大阪市立住まいのミュージアムに寄託保管願っており、箱もいくつかは移されていますが、境内にも多数残されており



物品庫に整理された御迎船人形の箱 (令和7年5月)

しました。ようやくその整理、墨書等のデータの確認ができました。

◆博多人形ギャラリー・

人形クリーニング作業

また、いま「菅家廊下」の名称が付いている博多人形ギャラリー。かつて宝物館「流芳殿」で公開されていた人形パノラマ（現在のギャラリーは昭和六十二年から）も長年の痛みや汚れがありました。このたび専門家によるクリーニング作業が開始されています。（十一月末までの予定）クリーニング作業の詳細については、また同人形パノラマに見られる場面変更が近代以前からの当宮の天神縁起解釈に棹さすこともわかってきましたので、それも交えて、今後紹介させていただきます。



博多人形ギャラリー クリーニング作業開始 (令和7年10月)

〈宝物・文化財〉の活用と伝承は、収蔵施設計画ともかわりますが、千百二十五年から、次世代の千百五十年にもつなぐべき取り組みです。ご理解ご支援をお願いいたします。

（文化研究所 鈴木幸人）

大阪天満宮講社連合会 結成五十周年記念祝賀会

去る十月四日十八時から帝国ホテル大阪「孔雀西の間」において、講社連合会の五十周年記念の祝賀会が開催されました。

◆昭和四十九年の船渡御の中止

「講社連合会」が結成されたのは昭和五十年（一九七五）九月のこと、結成の契機となったのは前年の船渡御の中止でした。

昭和四十八年十月に始まった第四次中東戦争を機に、原油の供給が逼迫、価格も高騰し、世界経済の混乱が生じました（石油ショック）。その影響によって、昭和四十九年の天神祭の船渡御は中止を余儀なくされたのです。

そこで天神祭に奉仕していた三五の講社・団体が相互の協力体制を、より一層強めるために連合会を結成したのです。

◆船渡御中止は「大阪の恥や」

記念祝賀会は、講社連合会会長の森本幸一様（天神講獅子講元）のご挨拶に始まり、続いて来賓代表として当宮の寺井種治宮司、天神祭実行委員長の栗原宏武様のご挨拶がありました。

宮司の挨拶では、石油ショックによる船渡御中止時の逸話が紹介されました。当時の大阪商工会議所会頭で天神祭渡御行事保存協賛会の佐伯勇会長が、「天神祭ができないというのは大阪の恥や」と仰って、自ら先頭に立って企業を廻り、協賛金を募り翌年の船渡御復活に尽力されたというエピソードです。

出席の皆様は、改めて大阪における天神祭の意義深さに思いを致すこととなりました。

その後、森本会長から寺井宮司に奉納品目録（本社弊殿の「御簾十張」の贈呈を経て、氏子常任総代の西端勝樹様による乾杯で会食となりました。



歓談中には、余興として、J-POPユニットのEL-KING様や津軽三味線の久保田祐司様のご歌・演奏により座が一層盛り上がりしました。

盛会裡の二十時半には各講元が登壇し、連合会副会長の宮本善樹様



（鳳講講元）の大阪締めで中締めとなりました。

EXPO2025 大阪・関西万博

去る四月十三日から十月十三日まで、大阪市此花区の人工島「夢洲」で大阪・関西万博が開催されました。「いのち輝く未来社会のデザイン」のテーマのもとに、国内外の多くの皆様で賑わったことは周知ですが、当宮もささやかながらご協力させていただきました。

万博ミニ花火

万博期間中の七月十九日から八月三十一日にかけて「ミニ花火大会」が企画され、そのうちの七月十九日（土）・二十日（日）・二十二日（火）・二十四日（木）・二十五日（金）の五日間は、天神祭のオリジナル花火「紅梅」が打ち上げられました。



最終日の七月二十五日は、いうまでもなく天神祭本宮でしたから、この夜は船渡御の行き交う大川岸と、

万博会場において、「紅梅」が同時に
光り輝くことになりました。



夢キタ ミュージックフェス



また、九月四日から十七日にかけては「大阪ウィーク EXPO2025 秋の陣」と銘打ち、会場内各所において種々の企画が行われ、九月七日には「大阪ヘルスケアパビリオン リボーステージ」で大阪市北区の中・高等学校によるコンサートが開かれ、当宮の神職も雅楽の演奏を行いました。

伝統と格式の 天満宮会館

由緒ある大阪天満宮の境内に付む「天満宮会館」は、伝統と格式に包まれた特別な結婚式を実現できる会場です。



四季折々の自然に彩られた庭園は神聖で厳かな空気をまとい、ふたりの門出を祝福します。

梅花殿にて執り行う神前挙式は、琴の音色に包まれながら厳粛で心に残る誓いを交わすことができます。また披露宴会場は和の趣と現代的なデザイン性を兼ね備え、和装にも洋装にも映える落ち着いた空間。大切なゲストを迎えるにふさわしい場として、華やかで心温まるひとときを演出します。

御料理は旬の食材をふんだんに取り入れた和洋折衷の会席料理で、見た目の美しさと味わいの両方でゲストの皆様から高い評価をいただいております。

さらに平日を中心に、お宮参りや七五三といったご家族の大切なお祝



い事のお食事会も承っており、世代を超えて集う場としてご利用いただけます。
アクセスの良さも魅力のひとつで、ご親族やご友人にも安心してお越しいただけます。歴史と伝統を受け継ぐ特別な空間で、人生の節目を彩る心に残る一日をお過ごしください。



吹田の民話「天神屋敷」と 講談「天神屋敷の由来」

吹田市に伝わる民話四十話を収録した『ききがき吹田の民話』（吹田市広報課、昭和五十九年）に、当宮にまつわる民話「天神屋敷」が載っていますのでご紹介しましょう。

「大阪の陣」と橋本清太夫

話の舞台は、江戸時代初頭の「大阪の陣」。慶長十九年（一六一四）十月に大阪冬の陣が起こると、神崎川北側の吹田に徳川軍が陣取り、南側の豊臣方に味方する中島一揆と対立しました。このとき、当宮は中島一揆に加勢したのですが、吹田の有力者・橋本清太夫の説得に応じて一揆勢とともに兵を引きました。

その翌年四月に夏の陣が起こると、当宮は前年の由縁から、御神体を奉戴した神輿を橋本邸（吹田市南高浜町）に遷します。

この移徙の直後に「天満天神社中」から橋本家に宛てた書状には、「社中家内・老若男女ども残らず、其許様御宅へ向け逃げ退かせ候間、何とぞお世話の程、希い奉り候」と記さ

れています。御神体だけではなく、社中の家族までもが避難させてもらったのです。この史実を踏まえたのが以下の民話です。



「天満天神社中」の書状

民話「天神屋敷」

むかし昔、吹田村神境が、まだ堀の内とも侍内とも言うてた時分、そこに橋本清太夫という分限者がいた。その時分は、西の豊臣方か東の徳川方かちゅう戦国の世で、静かやっ

た吹田村までがだんだん騒がしなつて、百姓衆の中でも血の気の多い若いもんはこっそりおらんようになつたりしたそう。清太夫さんの邸へは、戦さのための使いのもんが西方も東方もひっきりなしに訪ねてきよつたそう。ほんに清太夫さんは困らした。



「橋本家屋敷図」(○印が「天神社」)

いよいよ雲行きが激しいなつて、もうどっちかへ従かなあかんようになつてしもた。

そんなある夜ふけ、吹田の浜にひっそりと一その舟が着いて神輿が一基おりたつた。神輿はしずしずと清太夫さんの邸に入つていったんやそう。

「清太夫さま、えらいこととおます。戦さがおこります。この神輿は戦さに拘りがおません。町の衆がお祭りのうれしさによるこんでかつぐ神輿でおます。清太夫さまは平和な静かなお人柄、戦さに拘わりがあるう答がないとおたのみに参じましたのんます。神輿をまもつとくはなれ」

「なるほど」

と清太夫さんは戦さに拘わらんと神輿をまもることにきめやしたそう。

戦さがおこつて、それで戦さがすんで、落ち武者がどつと吹田の浜へなだれこみよつた。清太夫さんは敵味方なくかくもうたり怪我のてあてをしてやらはした。

「おおきに、有難うさんで」

と、神輿はまた吹田の浜から舟に乗つて大阪は天満の天神さんへ戻つていかはつたそう。

今、橋本清太夫さんの邸跡はどのあたりからのあたりまでやったんか、ようわからんにしても、正福寺に今でも「天神境内」ちゅう石碑が残つてるし、その辺りのことを天神屋敷やちゅうて、神境町の人々の中にちゃんと語りつたえられているちゅうこつちや。

「天神境内」の碑

寛政十一年（一七九九）の「橋本屋敷地図」（橋本家文書）には、敷地の片隅に東西三間（五・五m）、南北三間四尺五寸（六・八m）の「天神社」が描かれています。陣の後に神輿が天満に戻ったあとも、橋本家では「天神社」をお祀りされたのです。



「天神境内」碑

文化元年（一八〇四）には、橋本家の邸内に「天神境内」の石碑（高さ七十六・五cm、幅三十五cm）が建てられました。しかし、明治初年に同家が神奈川県に転居されると、同碑は近くの正福寺に移されました。

講談「天神屋敷の由来」

ところで、近年にこの民話は思わぬスピンオフを生んでいます。

講談師の旭堂南雲さんが、この話をヒントに、新作講談『天神屋敷の由来』を創作されたのです。



旭堂南雲さん

南雲さんによると、以前から吹田でのお仕事をされており、地元の話や講談にしたいと模索されていたそうです。その一方、毎年の天神祭には船渡御の船で案内役もされていることから、吹田と当宮の御縁に導かれて、この講談が生まれたそうです。講談の冒頭を少しだけ引用しておきましょう。

ただいまの吹田市高浜町にごいまして大きなお屋敷。橋本清太夫という大層な物持ちで、穏やかな人柄で、神仏を大切に、月に一度は天満の天神さん、大阪天満宮へお参りをする。宮司さんともすつかりと顔なじみで……

続きは、どうぞ YouTube でお楽しみください。

（文化研究所 高島幸次）

大阪天満宮献詠 風月社

令和七年上半期

清流に河鹿の鳴きてなおさらに

山深みたるその静けさを

松村 暁二

清けみつ富士湧水のきらひあひ

川なす流れはるけさたゝゆ

佐野 秀子

神苑の灯消えて鎮もりぬ

菅公しのび十五夜を待つ

大北 滋保

短夜を明るく照らす星月夜

空を仰ぎて安寧祈り

中瀬 央子

わが恋をひとつ知りおり星月夜

青き少女の影をおいたり

鈴木 敬子

青空の何処より生る赤蜻蛉

群れて戯むる秋の一とき

家治 綾子

たれかれと心ゆくまで話したき

紫陽花濃ゆき梅雨寒の夜

乾 恵子

青もみじ揺らし吹き来る薫風に

おもわず面あげ仰ぐ青空

北岡由紀子

都ては姿見られぬ赤蜻蛉

ふるさとの空思ひ出しぬ

伊藤 凉子

思ひ出の桜とならん父母と

年毎見あぐ通ひ路の花

南口一二美

長雨打つ窓に重ぬる声遠く

山ほととぎす愁ひさらなり

坂井田礼子

日は暮れてすずしき風と尋ね来て

心清がしき鈴虫の声

忠津 清治

さみだれの花の紐とく橘を

恋ひてや通ふ皐月の風は

木下 常世

御戦のやみて八十年靖国に

咲ける桜のみかげたふとし

柳野 等

社務所 電話番号だより

よくあるお問い合わせ

『十三詣（じゅうさんまいり）』

私たちが子どもの成長を願う人生儀礼には、「安産祈願」「初宮詣」「七五三詣」や「十三詣」などがあります。なかでも「十三詣」は、関西地方で多く行われており、十三歳の春に神社やお寺でお知恵を授かる風習です。

十三の根拠については、私たちに身近な十三の諸仏の内、十三番目に現れたのが知恵の仏様である虚空蔵菩薩だったことや、干支が一回りする数え年の十三歳や、十三歳の元服に大人の仲間入りとして大人の寸法の着物を着始める時期として厄払いの意味も込めたなど諸説あります。

京都の法輪寺、大阪の太平寺、奈良の弘仁寺などへのお参りが多いようですが、時代とともに神社への参拝も増えており、学問の神、知恵の神として天神様をはじめ、地元の方神様への十三詣も広まっています。

お詣りの時期としては、旧暦の三月十三日の前後、新暦の三月十三日から五月十三日までの間がよいとされています。

「十三詣」には、ちよつと変わった風習があります。参拝してから境内を出るまで、

または帰宅するまでは後ろ

を振り返って

はいけないと



いうのです。授かった知恵をお返ししてしまいうからだそうです。頂いたお知恵をなるべくたくさん持ち帰りたいという気持ちはよく解るのですが、関西人らしい習わしですね。

二十歳を成人としていた時代から近年には十八歳成人になりました、古い時代は十三歳、十五歳を元服としていたのですから、時代の社会状況によって大人になるという概念もこれから先、さらに変化していくのでしょうか。

境外の天満宮・天神祭

天満天神社さんけい道

「老松通」

西天満地域を東西に横切る老松通は当宮の表参道として栄えてきましたが、今そのシンボルが所々に見受けられます。

まずは新御堂筋から老松通（鳥居筋）に入る辻には、「天満宮 是ヨリ東七丁」と刻まれた道標が建っています。

ます。

道標の説明書によると、明治三十六年（一九〇三）に梅田停車場（大阪駅）と大江橋間に梅田新道が完成したのに伴い、現在地から西一〇〇mの御堂筋角に建てられたのですが、その後、新御堂筋の開通などによる周辺の環境変化により、昭和五十七年（一九八二）九月に現在地に移された、とあります。



老松通に入る辻の道標

碑の裏面には「明治卅七年七月建立老松町壹丁目貳丁目参丁目有志中」と記され、往時の老松町氏子の皆様の崇敬心が偲ばれます。

そして裁判所東筋と老松通の交差にある老松公園。こちらには平成十五年の公園整備時に、西天満連合神鈴講様によって建てられた「大阪天満宮参道」の記念碑があります。碑

の左側には、江戸時代後期の画家・土佐光孚（一七八〇～一八五二）の掛幅本天神縁起絵『御絵伝』（大阪市指定文化財）の一場面が写されています。

新御堂筋の道標から老松公園の碑



老松公園の記念碑

を経て、堺筋の東詰に至ると、ご存知の大鳥居が現れます。この鳥居は、従前の石鳥居が平成七年の阪神淡路大震災によって損傷したため、耐候性鋼板で再建されたものです。

皆様も「天満天神社さんけい道」（上記道標北面の刻字を歴史に思いを馳せながら辿ってみてはいかがでしょう。〈広報企画室 仲真矢〉

天神祭の天神さんと私⑨

天神祭に惹かれてこの町へ

蓮見 早江



大阪天満宮のそばに住まいを移したのは、今から十一年前。交通の便が良いことも引越先の条件でしたが、最終的に「ここにしよう」と私の背中を押してくれたのは大阪天満宮の存在でした。

縁もゆかりもない土地でしたが「天神様が見守ってくださる場所であれば、きっと安心して暮らせる。」と思えたのです。

決め手となったのは日本三大祭である天神祭。境内や商店街の賑わい、夜空を彩る奉納花火。そして町全体が祭を大切にしている空気感。特に町を練り歩く陸渡御は圧巻で町の人々が心を一つにして行列を進める姿に胸を打たれました。

以来、毎年この天神祭を心待ちにし、町の活気を肌感じます。いつ

か私も祭を見る側でなく陸渡御の行列で踊りに加わり、この町に更に深く根付いていきたいと思っています。

また、私は丑年生まれで天神さんの神使が牛である事にも不思議な御縁を感じます。更に九紫火星の私は「学び」が開運に繋がる星回りで、学問の神様である天神さんは私の守り神様と感じ、国際試験の時は沢山の神頼みをしました。心細さや不安を抱える私に寄り添いサポートくださった天神様のおかげで無事合格できました。

私は普段、九星気学鑑定士としての活動を中心に風水や薬膳を取り入れ「暮らしの氣を整える」お手伝いをしています。その中で天神様との御縁をお客様にも感じて頂きたく、書写会や鷲替え神事、節分祭などの神事に参加させて頂いています。

共に祈りを捧げる時間を分かち合う事で、お客様も私自身も、天神様との御縁が深まり守られている事を実感しています。

これからも大阪天満宮のそばで暮らしを重ね、この土地の賑わいと暖かさを感じながら過ごしていき「天満の天神さんと共にある日々の方へ」を、お客様をはじめ多くの方へ伝えていければと思っています。

天満宮スカウト 活動日誌

去る八月二十二〜二十四日、ボーイスカウト大阪第九十八団発団六十年、ガールスカウト大阪府第八十一団発団五十五周年を記念して、両団合同で滋賀県のマキノ高原でキャンプを行いました。

◆ボーイスカウト大阪第九十八団 キャンプ中は湖水浴や飯盒炊飯・野営活動など、自然と触れ合いながら各隊で様々な活動を行いました。



しそうにしているスカウトも見受けられました。このキャンプを通し、スカウト達が一人前になるきっかけをつかんでくれていたら幸いです。

◆ガールスカウト大阪府第八十一団 小学校高学年と中高生は、皆で協力しながら炊事を行ったり、川遊びや生き物を観察したり、小学校低学年は親元を離れての民宿舎営を経験しつつ、水遊びや山に囲まれた野原で初めてのやまびこを体験しました。盛大なキャンプファイアの後には、豪華な飾り切りのフルーツポンチに歓声が湧き、目にも楽しいおやつとの時間でした。



最後の夜には、天満宮スカウトユースが中心となってキャンプファイア計画をしてくれて、スカウト・指導者共に心に残るものとなりました。なかには、初めて親元を離れ、寂

天満橋・天神橋のライトアップ

イトアップが実施されることとなります。

天満橋のライトアップ

皆様お馴染みの天満橋・天神橋は夜間、ライトアップされますが、この夜間の照明が当宮と天神祭に縁があることはご存じだったでしょうか？

大阪は江戸時代から「浪華八百八

橋」と言われ、橋の多い町として知られていましたが、中でも難波橋・天神橋・天満橋の三橋は「浪華の三大橋」と親しまれてきました。そして平成二十一年、「水都大阪」という事業の中で「浪華の三大橋」のラ

イトアップが実施されることとなります。天満橋のライトアップコンセプトは「天が満つる光の架け橋」。大阪の硝子業発祥の地・天満をイメージした切子模様が橋の側面に浮かび上がり、当宮の星合池をモチーフに星が川面に映るよう

に演出されています。一方、天神橋のコンセプトは「灯りのゆらめき」。天神祭の灯りや、灯籠をイメージした演出です。

天神祭は、大川に映る花火や篝火などの華麗な姿から「火と水の祭典」とも呼ばれていますが、天満橋の青

天満橋のライトアップ



天神橋のライトアップ



天神橋のオレンジの両ライトアップは「火と水の祭典」である天神祭を想起させます。

そもそも初代の天神橋は文禄三年（一五九四）に当時の当宮社僧・大村由己が神領収納米を以って架けたものでした。

これから天満橋と天神橋のライトアップをご覧になる際には、往時の経緯や天神祭にも思いを馳せていただければと思います。

（広報企画室 仲真矢）

広報室だより

新規授与品

『神鏡守（みかがみまもり）』

令和八年一月一日から新たに頒布いたします『神鏡守』をご紹介します。

●「身だしなみ・自分磨き」の象徴

鏡は身だしなみを整えるだけでなく、自分自身と向き合う「内省」の道具でもあります。

御祭神である菅原道真公が学問の神様であることにちなみ、「外見だけではなく、知性や心を磨く」という意味を込めています。

●「幸せを映し出す」縁起物

鏡は古来より災難を祓い良き運氣を引き寄せる縁起の良いものと

されています。「災いを除けてたくさんの幸せを映し出す」ように祈念しております。

●素材は「マジックミラー」

マジックミラーの特性として光が透過する特徴があります。中央の鏡部分から光をのぞくと、その光と共に当宮の神紋である梅鉢紋が浮かび上がるよう仕掛けを施しています。

明るい希望の光に照らされるような授与品に謹製いたしました。



日本の伝統的な御守りの中でも、鏡を素材としたものは珍しく、「唯一無二の特別感」を持ち、梅の紋様と鏡の輝きが融合したデザインは、当宮でしか受けられない特別な授与品でございます。

願意は『災難除・開運招福』。初穂料は一〇〇〇円のお納めでございます。

天満天神研究会

(天天研)の報告

このところ毎号ご紹介できておりますように、天満天神研究会(略称…天天研)を継続的に開催しています。

報告②

北山円正

(神戸女子大学名誉教授)

「讃岐守時代の道真」

●第八回 天満天神研究会

令和七年九月二十日

報告

鈴木幸人(当宮文化研究所研究員)

「大阪天満宮の縁起絵をめぐって
雷神のいない天神縁起絵・
天拝山のない菅公一代記」

再来年、令和九年(二〇二七)に迫って参りました「菅道真公御神退千二百二十五年式年大祭」を見ずえ、多様な専門分野の研究者、すなわち大学の教員や文化財保護の担当者、博物館の学芸員らが集まりまして、菅公や天神信仰に関わる文化や歴史、また当宮に関するこれまでの研究や言説の洗い直しに取り組み、改めての成果公開をめざしています。

この夏シーズンに開催した第七回、第八回の研究会について、報告者と報告題目、参加者を記しておきます。(各回とも土曜日の開催、午後五時から七時まで、場所は当宮文華館三階。文中敬称を略します。)

●第七回 天満天神研究会

令和七年五月三十一日

報告①

西山由理花(大阪工業大学講師)

「近代の大阪天満宮」

…政治と都市生活」

浪速菅廟吟社詠草

深翠 浦田佳彰撰

五月席題 薫風鯉幟

不孤 松村 曉二 八尾市

錦繡鯉魚竿上風 健軀遊泳夏初穹

當家男子賀生誕 邦土繁榮識建功

《訓読》錦繡の鯉魚竿上の風、健軀

遊泳す夏初の穹、當家の男子生誕を

賀す、邦土の繁榮建功を識る

《通釈》錦で織られた鯉が高く立て

られた竿の上で風に靡く。その姿は

夏の初めの空を力強く泳いでいるよ

うだ。この鯉のぼりを掲げる家は産

まれてきた男児を祝っているのだろ

う。国の未来の繁榮はこの男児の働

きによるものだ。

六月課題 茅屋人梅

貴山 忠津清治 八尾市

草屋安閑邑里中 耕終憩息白頭翁

絲絲雨脚新秋濕 庶幾迎秋穀稻豐

《訓読》草屋安閑として邑里の中、

耕し終えて憩息す白頭の翁、絲絲た

る雨脚新秋濕(うるお)し、庶幾す

秋を迎えて穀稲豊かなるを

《通釈》村の中にあるこの粗末な住

処は安穩でまた閑かで、農作業を終

えて帰ってきた白髪の老人が休んで

いるだけ。糸のような雨が降り始め

畑の新芽を潤す。願わくば来る秋は
稲がよく実りますように。

七月課題 海邊旅亭

笙麗 坂井田礼子 長野県

灣頭一帶釣舟多 遊子愉觀鷗戲波

求借漁莊晚潮碧 欄干涼氣透輕羅

《訓読》灣頭一帶釣舟多し、遊子愉

しみ觀る鷗の波に戲れるを、漁莊を

求借すれば晩潮は碧なりて、欄干の

涼氣輕羅を透る

《通釈》砂浜の灣のほとりは釣り船

多し。遊客はカモメが寄せ来る波に

戲れるのを見て愉しむ。宿泊のため

岸辺にある漁師の建物を求めて借り

た。夜の海の色は深い青。ベランダ

に出ると風が夏服に透けて涼しい。

八月課題 江畔煙火

深翠 浦田佳彰 奈良県

日暮靈魂籠裏憑 少年起浪逐流燈

愈無淺處膝將浸 空送朱煙仰月昇

《訓読》日暮れて靈魂籠裏に憑く、

少年浪を起こし流灯を逐う、愈よ浅

き処無く膝將に浸かんとす、空しく

朱煙を送り月の昇るを仰ぐ

《通釈》日が落ち灯籠に靈魂が宿っ

た。子供は波を立て、流れゆく灯籠

を追いかける。どんどん浅瀬を過ぎ

膝まで浸かる。ただ赤い煙と月の登

るのを空しく眺めるだけ。

菅原道真公御神退千二百三十五年 式年大祭

記念事業

御本社拝殿の御屋根葺き替え工事開始

菅原道真公の御神退から千二百三十五年目に当たります令和九年の式年大祭は、同年の四月末に中心となる神事や奉祝行事を行います。この前後にもさまざまな事業を計画しています。その一つとして、今年の八月から来年十月まで御本社の拝殿の御屋根葺き替え工事が始まっています。

当初の令和元年ごろの計画準備の段階では、令和九年までに記念計画を実施完遂して大祭の年を迎えようとするものでしたが、その年末ごろから始まった新型コロナウイルスの世界的蔓延によって、計画は大幅な変更を余儀なくされました。

コロナ禍という非常事態の中にあつてあらゆる方面から再度検討、調査を行った結果、次のような基本方針を定めました。

当初の令和元年ごろの計画準備の段階では、令和九年までに記念計画

一、令和九年の前に重要課題であつ

た御本社御屋根の老朽化部分の内、特に優先すべき拝殿と幣殿前半分を改修する。

二、式年大祭斎行後に記念事業の一つである神具宝物（御鳳輦、神輿、宝物、書画資料）の収蔵庫の建設を行う。

三、これに続いて御本殿と幣殿の半分の御屋根の改修工事を行う。

祭が斎行され、大祭期日が大前に奉告されるとともに、拝殿の工事期間中にご祈祷を行う場所として参集殿内に新たに権殿が奉斎され、祈祷所を開設しました。

これから令和八年の秋までの御本殿は覆屋が掛けられ、ご参拝の皆様には大変ご不便をおかけいたしますが、安全第一に執り進めさせていただきますので、何卒ご理解ご諒承賜りますようお願い申し上げます。

また、御修理の御用材として銅板の御寄進を承っております。

このほか、近々には記念事業の奉賛募金活動も開始されますので、多くの皆様から御浄財が寄せられますよう、併せまして、謹んでお願い申し上げます。



大阪天満宮社報

てんまてんじん 第88号

令和7年10月20日印刷

令和7年10月25日発行

発行人 寺井種治

発行所 大阪天満宮社務所

〒530 0041 大阪市北区天神橋2-1-8

TEL 06-6353-0025

印刷所 木村印刷株式会社